

押切遺跡

発掘調査報告書

財団法人
山形県埋蔵文化財センター



6-1994-271-01

1994

1994
271
6

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

おし
押 切 遺 跡
きり
発掘調査報告書



平成 6 年 3 月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

094 - 271

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、押切遺跡の調査結果をまとめたものです。

押切遺跡は山形県の中央部東端に位置する天童市にあります。天童市は県都山形市の北に接し、東に奥羽山脈から連なる山々がそびえ、西側を最上川が北流しており、温泉と果樹・特徴的の駒の生産で知られています。

調査では、平安時代前半の土器・石製品・鉄製品などの遺物や、堅穴住居跡などの遺構が検出され、当時のこの地域の人々の生活の様子を知る手がかりが得られました。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産といえます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かなくらしは私たちが等しく切望しているところです。近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国道等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区内の遺跡の調査は、埋蔵文化財保護と開発事業実施のため、適切かつ迅速に行われる事が今日求められています。こうした要請に適切に対応するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成5年4月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に応え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が遂行されるようご支援ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成6年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例　　言

- 1 本書は主要地方道山形・天童線道路改良工事に係る「押切遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県土木部の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名 押切遺跡 (CTDOK) 遺跡番号 平成元年度登録
所在地 山形県天童市大字高木字押切
調査期間 発掘調査 平成5年4月1日～平成6年3月31日
現地調査 平成5年5月7日～平成5年7月29日 59日間
調査主体 財団法人山形県埋蔵文化財センター
発掘調査・資料整理担当
　　調査研究課長 佐々木洋治
　　主任調査研究員 野尻 侃
　　調査研究員 浅黄喜悦
　　嘱託職員 志田純子
- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県土木部山形建設事務所、天童市教育委員会、社団法人天童市シルバーパー人材センター等関係機関、並びに天童市の方々から協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成・執筆は浅黄喜悦、志田純子が担当した。編集は安部 実、伊藤邦弘が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。
- 6 出土遺物のうち、鉄製刀子1点については、財団法人元興寺文化財研究所に保存処理業務を委託した。
- 7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した造構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S T : 積穴住居跡 S B : 振立柱建物跡 S D : 溝跡 E P : 柱穴 E D : 周溝
E L : カマド E B : 掘り方 R P : 土器 R Q : 石器・石製品 R M : 金属製品
- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。
- 3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
 - (1) 遺跡概要図・造構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
 - (2) グリッドの南北軸はN→19°20'→Eを測る。
 - (3) 造構配置図は1/200・1/300縮図で採録し、各捕図毎にスケールを付した。
 - (4) 遺構実測図は1/40・1/100縮図で採録し、各捕図毎にスケールを付した。
 - (5) 遺構実測図第4～9図の砂目点は焼土を示す。
 - (6) 遺物実測図・拓影図は、土器については1/3、土器以外の遺物については1/2を標準として採録し、各々スケールを付した。
 - (7) 遺物図版については任意の縮尺であるが、同一器種の縮尺はほぼそろえてある。
 - (8) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
 - (9) 土器実測図・拓影図の断面では、網点を入れたものが土師器、白ヌキが須恵器、●が赤焼土器、▲が織文土器を表している。また、土器内の網点は黒色処理を表している。
 - (10) 拓影図は、土器断面の左側が外面を、右側が内面を表している。
 - (11) 出土遺物観察表中の()内の数値は、図上復元による推計値、または残存値を示している。
 - (12) 遺構覆土の色調について、1993年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に従った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の概要	
1 立地と自然環境	3
2 歴史的環境	3
III 検出遺構	
1 遺構の分布	7
2 積穴住居跡	7
3 挖立柱建物跡	8
4 溝状遺構	8
IV 出土遺物	
1 土 師 器	17
2 須 惠 器	17
3 赤焼土器	18
4 石製品・鉄製品など	18
V まとめ	28
報告書抄録	30

表

表1 積穴住居跡観察表	16
表2 出土遺物観察表（1）	26
表3 出土遺物観察表（2）	27

挿 図

図 版

第1図 遺跡位置図	2	図版1 遺跡全景
第2図 遺跡概要図	4	遺跡近景（調査前）
第3図 遺構配置図	5	試掘トレンチ掘り下げ作業
第4図 S T 2・8 積穴住居跡	9	重機による表土除去作業
第5図 S T 3 積穴住居跡	10	A区面整地作業
第6図 S T 4 積穴住居跡	11	図版2 S D112精査状況
第7図 S T 5 積穴住居跡	12	B区調査状況
第8図 S T 6 積穴住居跡	13	C区基本層序 B区基本層序
第9図 S T 7 積穴住居跡	14	調査終了状況
第10図 S B114掘立柱建物跡	14	空中写真測量作業状況
第11図 S D100溝状遺構	15	調査説明会状況
第12図 S D112溝状遺構	15	図版3 S T 2・8 積穴住居跡
第13図 出土遺物（1）	19	図版4 S T 3 積穴住居跡
第14図 出土遺物（2）	20	図版5 S T 4 積穴住居跡
第15図 出土遺物（3）	21	図版6 S T 5 積穴住居跡
第16図 出土遺物（4）	22	図版7 S T 6 積穴住居跡
第17図 出土遺物（5）	23	図版8 S T 7 積穴住居跡
第18図 出土遺物（6）	24	S B114掘立柱建物跡
第19図 出土遺物（7）	25	S D100溝状遺構
		S D112溝状遺構
		図版9 出土遺物（1）
		図版10 出土遺物（2）
		図版11 出土遺物（3）
		図版12 出土遺物（4）
		図版13 出土遺物（5）
		図版14 出土遺物（6）



I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、主要地方道山形・天童線の改良工事に係るものである。

本遺跡は、平成元年度に県教育委員会がこの一帯の分布調査を行った際、平安時代の遺物の散布が確認されたため、新規に登録され、平成2年度に試掘調査が実施された。

当初は北半を「押切遺跡」、南半を「古井戸遺跡」として隣合う2つの遺跡と認識されていたが、平成4年度に2度目の試掘調査を行ったところ、両遺跡が連続するものであると確認されたので、ひとつにまとめて「押切遺跡」とした。

なお、分布調査・試掘調査の結果、土師器・須恵器・赤焼土器などの遺物や、堅穴住跡の一部と考えられる遺構などが検出され、南北435mの範囲に分布する平安時代の集落跡と推定された。

その結果をもとに事業主体である山形県土木部山形建設事務所、地元の天童市教育委員会などの関係機関と協議を重ね、工事路線内にかかる範囲について、財団法人山形県埋蔵文化財センターが調査主体となって、工事に先立ち発掘調査を行い、記録保存を図ろうという運びになったものである。

2 調査の方法と経過

調査は、2m×5mのトレンチを10か所掘ることから始めた。当初、大きく北半をA区南半をB区と区分して調査区を設定したが、トレンチによる試掘の結果、A区とB区の間でも遺物が検出され、新たにC区を設定した。

なお、調査区には道路予定線のセンター杭を基準として5m×5mを単位とするグリッドを設定した。グリッドの南北軸は磁北から19°20'東に振れる。

次に重機械を使用して表土を30~40cm除去し、その後遺構検出・遺構精査・記録作業を行った。

調査の結果、遺跡の北側ほど河川の氾濫の影響が大きく、礫・砂などの堆積が顕著で、遺構・遺物の遺存状態が良くないことが把握できた。A区の南部分とC区で溝状の遺構が検出されたが、住居跡などの生活の痕跡は把握できなかった。

B区でも河川の氾濫の影響と思われる疊層などがあったが、それ以外の比較的安定していたと思われる地点で堅穴住跡・掘立柱建物跡が検出され、調査期間の後半の中心となつた。



- | | | |
|-------------------|------------------|------------------|
| 1 押切遺跡 | 2 柏木遺跡（縄文） | 3 北畠遺跡（奈良・平安） |
| 4 高木原口遺跡（古墳） | 5 高木石垣墳（縄文・室町） | 6 高木古墳出土地（奈良・平安） |
| 7 高木石田遺跡（奈良・平安） | 8 地蔵池A遺跡（縄文・弥生） | 9 地蔵池B遺跡（奈良・平安） |
| 10 金谷遺跡（縄文、縄倉・室町） | 11 熊野堂前遺跡（縄文） | 12 成生古墳群（古墳） |
| 13 成生橋（縄倉・室町） | 14 瓜小路遺跡（縄文） | 15 後藤原遺跡（縄文） |
| 16 二階堂屋敷（奈良・室町） | 17 的場遺跡（奈良・平安） | 18 一高遺跡（縄倉・室町） |
| 19 蔵増北山遺跡（奈良・平安） | 20 蔵増北山遺跡（縄倉・室町） | 21 清池清水遺跡（古墳） |
| 22 八反記田遺跡（縄文） | 23 西宿田遺跡（古墳～平安） | 24 小矢野自遺跡（奈良・平安） |
| 25 天童城（江戸） | 26 繩冢遺跡（縄文） | 27 繩掛B遺跡（縄文・弥生） |
| 28 繩掛A遺跡（奈良・平安） | 29 藤田遺跡（奈良・平安） | 30 千刈条里（奈良・平安） |
| 31 千刈遺跡（奈良・平安） | 32 駒田遺跡（縄文） | |

「山形県遺跡図」(1978年)、『分布調査報告書』(1993年) 山形県教育委員会による。

第1図 遺跡位置図 (S = 1 : 25,000)

II 遺跡の概要

1 立地と環境

押切遺跡は乱川扇状地の扇端部付近に位置している。標高は102~105mで、全体的に南西方向に向かってゆるやかに傾斜している。

乱川扇状地は、乱川とその支流の押切川、それに白水川・村山野川などの複合扇状地で半径10~11kmもある山形盆地最大の扇状地である。

本遺跡の周辺は、明治・大正・昭和初期にかけては桑、戦後はリンゴ・桜桃・桃などの果樹を中心とした畑地として利用されてきた。ただし河川の整備が進む前は、1.5kmほど北を西流する乱川、300mほど北を西流し乱川に合流する押切川、その他の小河川は流路が定まらず、降雨のたびに氾濫をくり返していたようである。それぞれの河川の名前にもかかわり、さまざまな伝承として語りつがれている。なお、現在のように押切川の両岸に堤防が築かれ、流路が定まったのが大正時代の末のことのようである。

2 歴史的環境

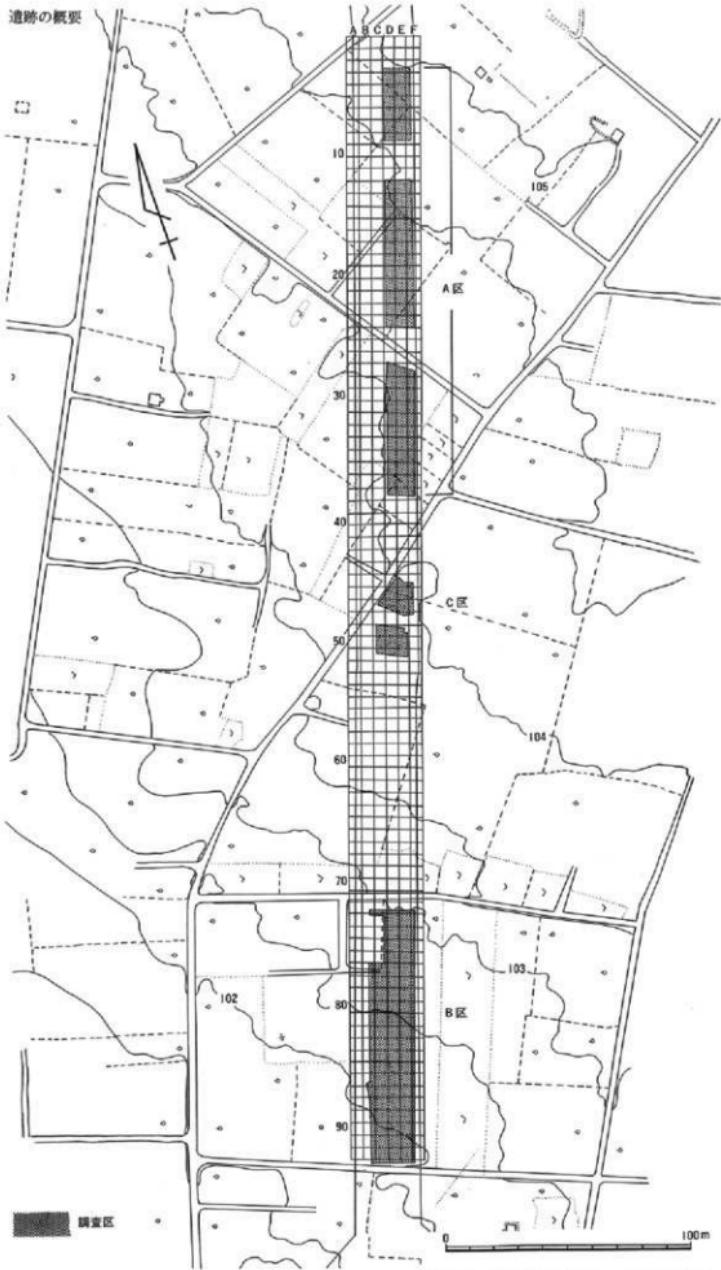
天童市には126か所の遺跡が登録されている。地形から分類すると、乱川扇状地の南に隣接する立谷川扇状地上に多く立地するが、乱川扇状地の前線部や、さらには西側の最上川によって形成された後背湿地帯の微高地に、縄文時代以降各時代にわたる遺跡が存在している。

本遺跡の北西約400mにある地蔵池A遺跡では、縄文時代終末から弥生時代にかけての堅穴住居跡や遺物が発見されており、本遺跡周辺で水稻耕作がかなり早い時期から始めていたと考えられる。また、本遺跡の南西3kmには、山形県教育委員会の発掘調査により、古墳時代の木製品や建築材を大量に検出して注目を集め、国指定史跡となった西沼田遺跡が存在する。本遺跡付近にも成生古墳群・清池清水遺跡など古墳時代の遺跡があり、水稻耕作を基盤とした経済社会の発達と共に、在地有力首長の勢力拡大があったと考えられる。

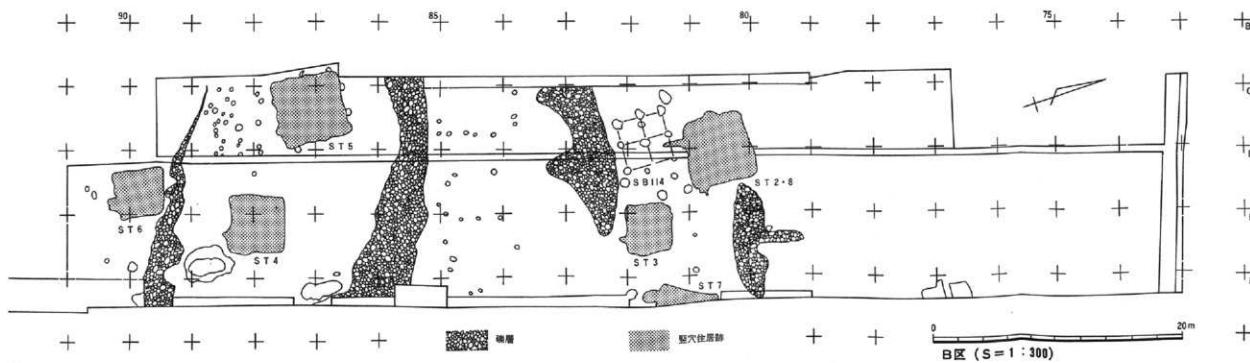
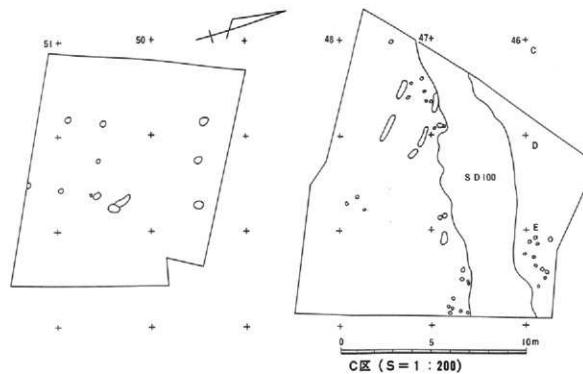
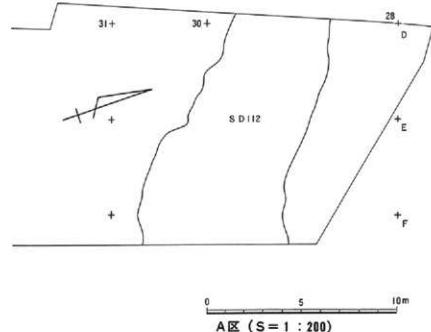
奈良・平安時代になると高木石田遺跡・地蔵池B遺跡・的場遺跡などが、乱川扇状地南西線上に連なる。平安時代後期に史料に登場するようになる成生村の経済基盤の形成が行われつつあった時代といえよう。上記3遺跡をつなぐ道路(通称「谷地街道」)から分かれ、本遺跡のすぐ南側を通り東へ向かう道路は、熊野神社さらには若松寺に向かう古道であるといわれており、その道筋には光戒壇遺跡などの遺跡があった。また、市街地化により破壊されてしまったが、現在の天童市役所周辺に綿掛遺跡群があり、平安期と考えられる土器が採集されている。

本遺跡の南東約3km、立谷川扇状地扇端に位置する荒谷原地区には、山形県総合運動公園がある。その造成に先立ち、昭和59年度に事業範囲にかかるいくつかの遺跡をまとめ荒谷原遺跡として、山形県教育委員会によって発掘調査が実施された。その結果9~10世紀の平安時代の集落跡と室町時代から江戸時代の遺構が検出されている。

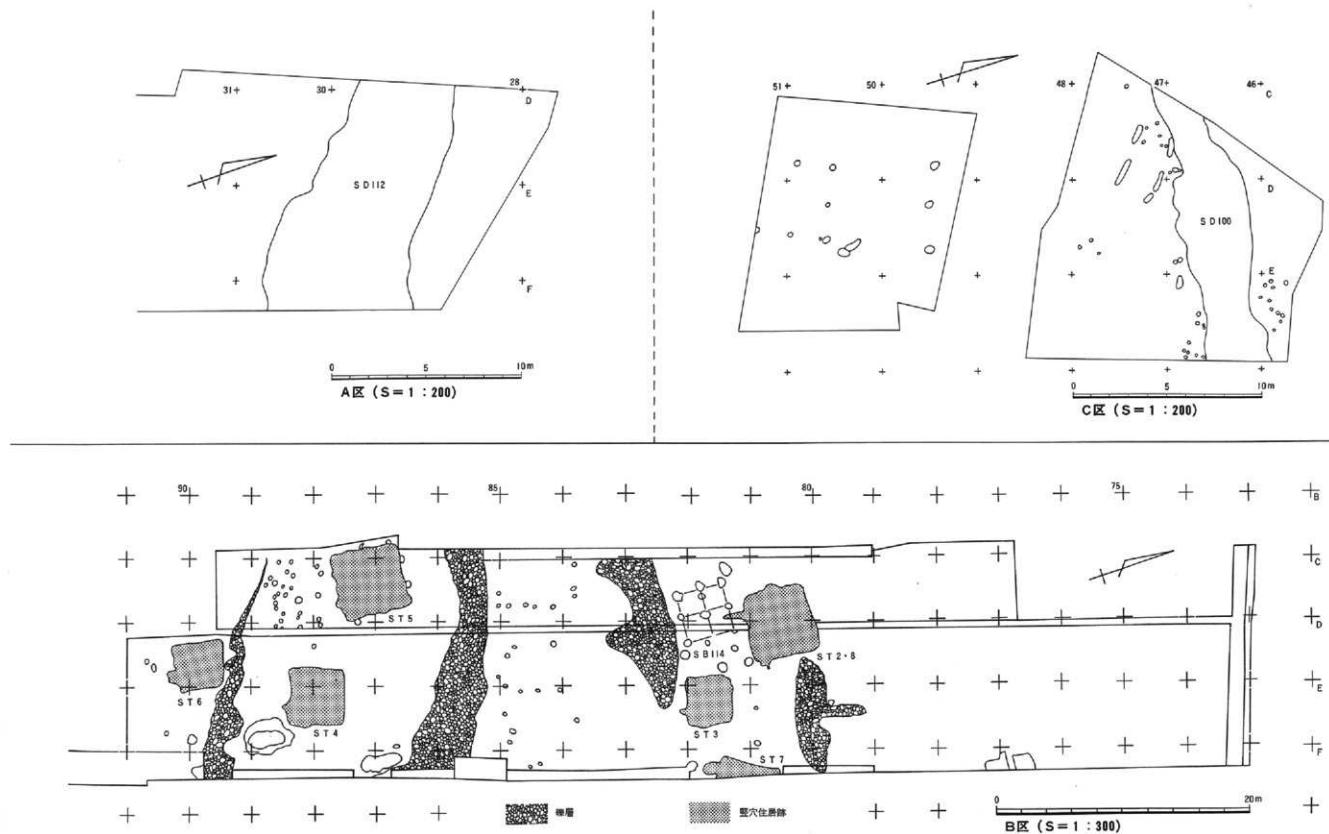
II 遺跡の概要



第2図 遺跡概要図 ($S = 1 : 2,000$)



第3図 造構配置図



第3図 造構配図

III 検出遺構

1 遺構の分布 (第2・3図)

遺跡の北側ほど河川の氾濫の影響が大きく、遺構・遺物の遺存状態が良くない。

A区では、最南部で東西に横切る溝状の遺構が検出されたのみであり、それ以北では、遺構・遺物は検出できなかった。C区でも東西に横切る溝状の遺構が検出されたが、それ以外の明確な遺構は把握できなかった。

B区では、竪穴住居跡が7棟、掘立柱建物跡が1棟検出され、今回の調査範囲での中心部分といえる。

2 竪穴住居跡 (第4~9図、表1、図版3~8)

B区において7棟（うち2棟は重複）確認された。ST 2~8である。基本的な数値等については表1にまとめてある。

ST 2は検出当初、カマドが南壁と東壁に2か所存在し解釈に苦しんだが、床面を精査した結果、内側をめぐる周溝が検出され、焼土の切り合い関係などと考え合わせて、建て替えが行われたと解釈し、外側に輪郭を持ち南壁にカマドを持つ住居跡をST 2、内側をめぐる周溝と東の壁にカマドを持つ住居跡をST 8としたものである。前後関係はST 2→ST 8である。

竪穴住居跡について総括的な状況を述べる。

遺存状況は全体的に良くない。

平面プランは隅丸のほぼ正方形を基本とし、やや南北方向に長い長方形を呈するものもある。

規模は①一辺3m台を示すもの=ST 3 ST 6

②一辺4m台を示すもの=ST 4 ST 7 ST 8

③一辺5m台を示すもの=ST 2 ST 5

の3つのグループに分類できる。

村山地方でほぼ同じ時期と考えられる遺跡では、一辺6~7mを測る竪穴住居跡も存在することから考えると、この時期としては中形から小形に属するといえる。

主軸方向は、全て南北方向にそろい、磁北から若干東に振れることが共通している。磁北からの振れの大きさで分けると

①7~8°程度のもの = ST 2 ST 5 ST 8

②13~22°程度のもの = ST 3 ST 4 ST 6

③35°と振れの大きいもの = ST 7

と分類できる。

カマドは全ての住居跡で検出されており、設置位置は、ST 8を除いてすべて南壁で共通する。この地域で最も頻繁に吹く北西からの風を考慮したことと考えられる。

カマドの遺存状況は全体的に良くない。上部構造を把握できた例はなく、燃焼部・袖部

煙道部などを確認するにとどまった例が多い。カマド内の支脚を検出できたのが、ST 3・4・6・8である。

以下、特色ある例について述べる。

ST 5（第7図、図版6）では、主柱穴が4基確認された。EP 1～3の周縁では、踏み固められた床面に食い込んだ状態で小礫が集中して検出され、根固めに用いたものと考えられる。また部分的に検出された周溝に沿ってと平面プランの外周に小柱穴が十数基検出されており、何らかの支柱の役割を果たしたものと考えられる。

ST 6（第8図、図版7）は、平面プランは最も小規模ながら、カマドは石組みをめぐらせたしきりしたやりで、本遺跡の検出例中最大の規模を示す。この住居内から鐵製刀子が1点と斐ゴの羽口の破片が1点、鉄滓が1点検出されている。農器具等を生産した「小鍛冶」の工房跡と考えられる。

ST 7（第9図、図版8）のカマドでは、焚口部の堆積土のほぼ中央に、須恵器の壺が伏せられた状態で検出された。カマド神・火神等を祭める信仰に連なる可能性があるが、詳細は不明である。

ST 4・ST 8では石製紡錘車がそれぞれ1点ずつ検出された。自家用のものか、納税のためか、機織が行われていたことがうかがわれる。

3 堀立柱建物跡（第10図、図版8）

81-C・D、82-C・Dグリッドにおいて検出された。南北2間×東西2間の総柱の建物跡と考えられる。

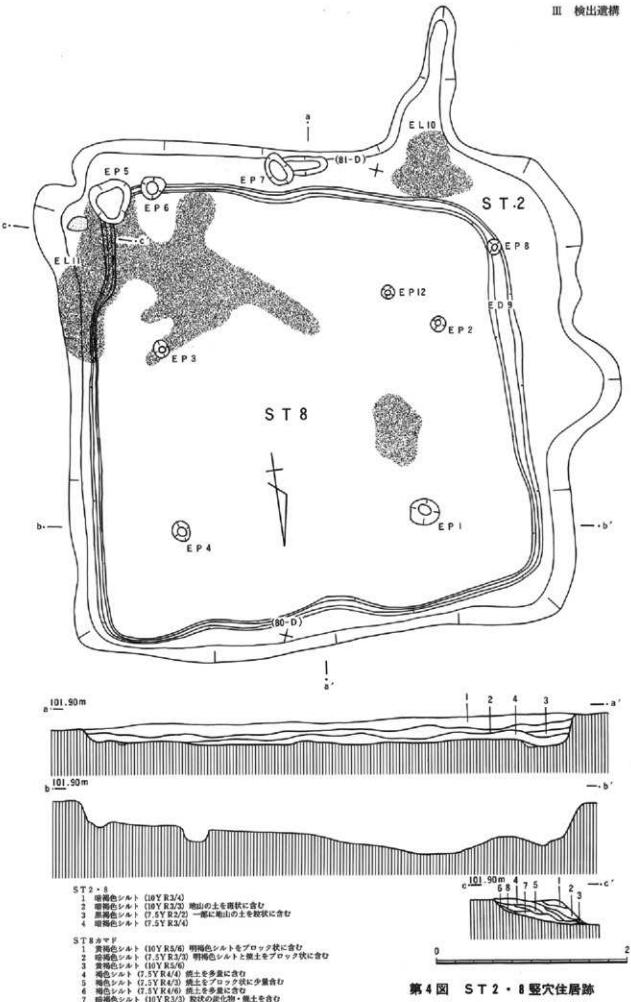
建物の規模は南北3.8m、東西3.6mのほぼ正方形で、南北軸方向はN-7'-Eをかかり、若干東に振れている。柱間距離は南北列が1.9m前後、東西列が1.8m前後である。柱の掘り方は径40cmのほぼ円形のものから、短径40cm・長径80cmの長円形のものまである。確認面からの深さは30cm～40cm前後である。明確にアタリを確認できた例はない。また掘り方覆土内からの遺物の出土はなかった。

北辺がST 2のカマド煙道部と切り合っていることから、ST 2と併存したとは考えられない。輪方向が一致すること、ST 8が本遺跡内では例外的にカマドを東辺に設置していることから、ST 8と同時期に併存した可能性が高く、住居と隣接した高床式の倉庫跡と考えられる。

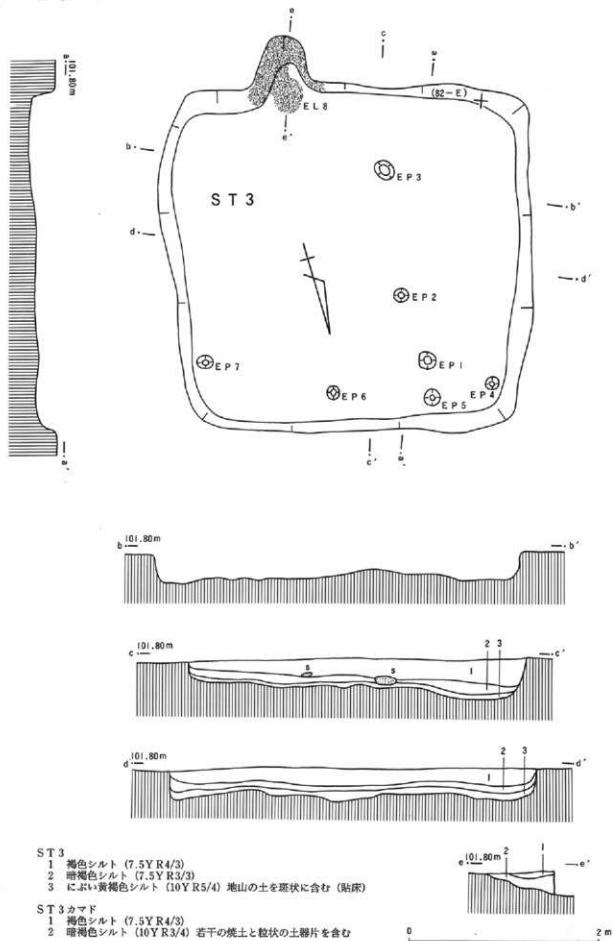
4 溝状遺構（第11・12図、図版8）

S D100はC区で検出されたものである。最大幅約4m、確認面からの深さは最深部で約25cmをはかる。輪郭・底の形状とも凹凸が激しい。覆土は2層に分けられるが、流れ込みと思われる土師器・須恵器・赤焼土器の小片が上層に含まれる。下層には遺物が伴わない。

S D112はA区で検出されたものである。最大幅約7m、検出面からの深さは最深部で50cmをはかる。底は両岸から最深部にかけてなだらかな傾斜をみせ、SD100とは異なっている。覆土は2層に分かれ、流れ込みと思われる土師器・須恵器の小片が上層に若干含まれる。下層には遺物が伴わない。

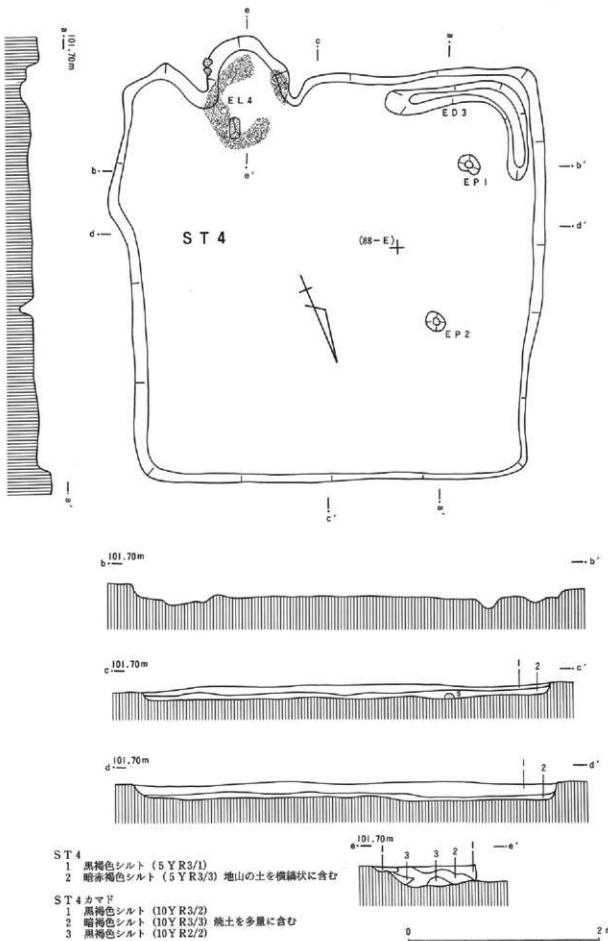


III 検出遺構



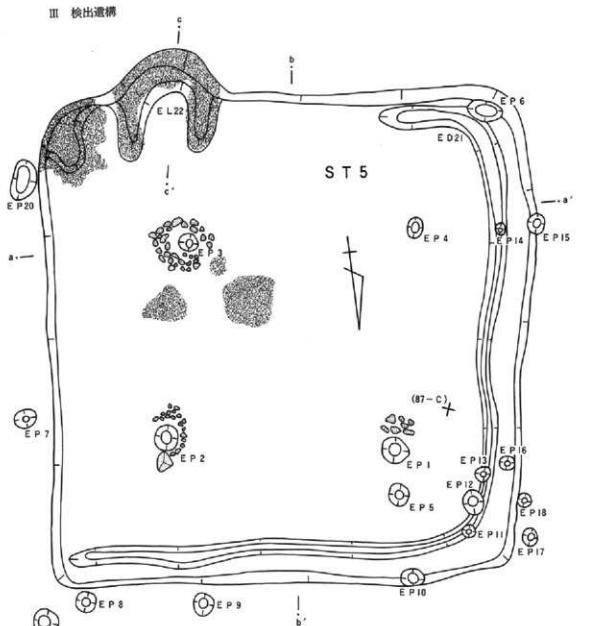
第5図 ST 3 壇穴住居跡

III 検出遺構



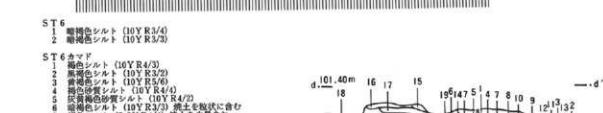
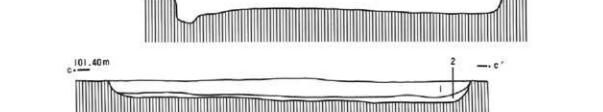
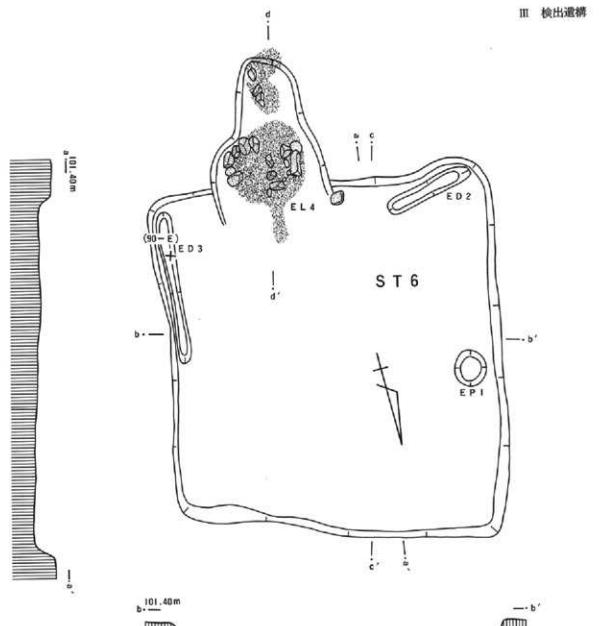
第6図 ST 4 壇穴住居跡

III 検出遺構



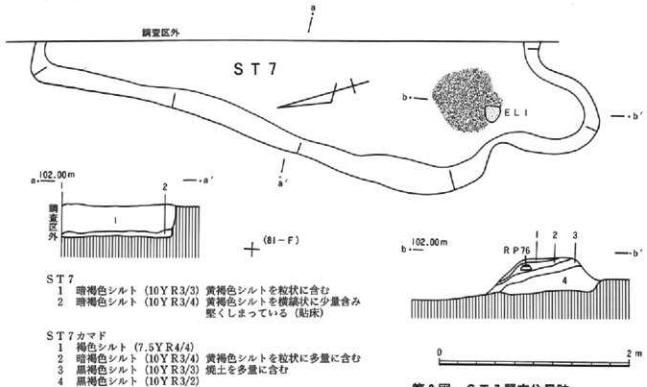
第7図 ST 5 穫穴住居跡

III 検出遺構

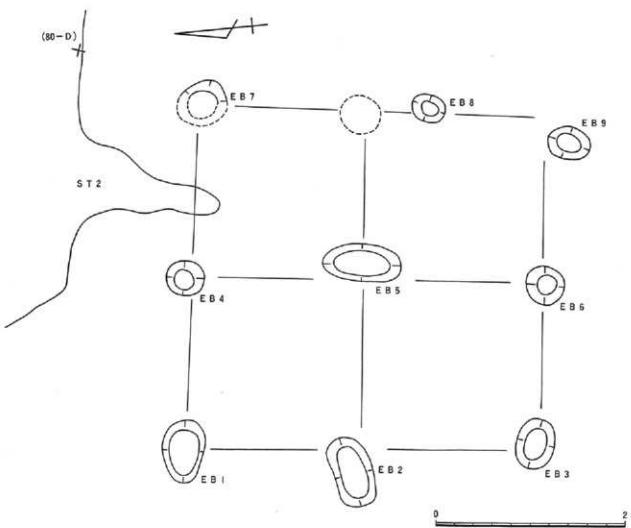


第8図 ST 6 穫穴住居跡

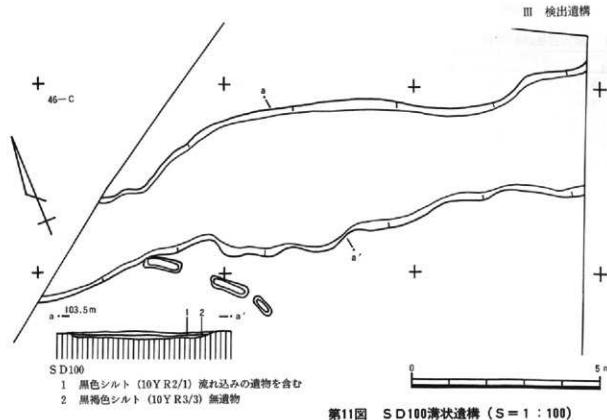
III 検出造構



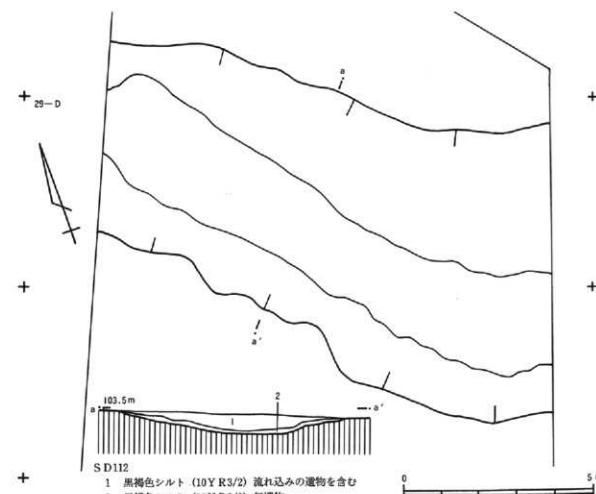
第9図 ST 7 垂直住居跡



第10図 SB114 垂直柱建物跡



第11図 SD100 垂直構造 (S = 1 : 100)



第12図 SD112 垂直構造 (S = 1 : 100)

III 検出遺構

表1 穴住居跡観察表

項目	住居跡No	S T 2	S T 3	S T 4	S T 5
位置(グリッド)		79-D 80-D 80-C 81-C	81-D 81-E 87-E 88-E	87-D 88-D 87-E 88-E	86-B 87-B 86-C 87-C
規模(cm)		東西510 南北500	東西390 南北360	東西450 南北430	東西510 南北520
平面プラン		楕丸のほぼ正方形	楕丸の長方形	楕丸のほぼ正方形	楕丸のほぼ正方形
主軸方向		N-8'-E	N-16'-E	N-22'-E	N-7'-E
遺存状態		やや不良	やや不良	やや不良	やや不良
壁の立ち上がり		急	急	急	急
確認面からの深さ(cm)		約25	30~40	15~20	約15
床面	貼床	—	中央部に一部認められる	あり	中央部、圓くしまる
	起伏	—	ほとんどなし	なし	西壁際でやや激しい
	傾斜	—	北側にゆるやかに傾斜	なし	西側にゆるやかに傾斜
	焼土	—	なし	なし	EP 3周間に若干
柱穴		—	5基	2基	20基
カマド	位置	南壁西寄り	南壁東寄り	南壁東寄り	南壁東寄り
	住居跡主軸に対する割れ	10'-E	2'-E	1'-E	5'-E
	遺存状態	不良	やや不良	やや不良	不良
	煙道長さ(cm)	125	30	35	—
	本体長さ(cm)	60	85	65	80
	幅(cm)	70	50	65	70
	焚口の幅(cm)	50	40	40	45
	袖部	不明	西側に袖石	壁面から60cm張り出す	壁面から40cm張り出す
	焼土・炭化物	燃焼部に密	燃焼部に密	燃焼部中央	燃焼部周辺
	支脚	なし	あり	あり	なし

項目	住居跡No	S T 6	S T 7	S T 8
位置(グリッド)		89-D 90-D 89-E 90-E	80-F 81-F 80-C 81-C	79-D 80-D 80-C 81-C
規模(cm)		東西360 南北350	東西— 南北470 (2/3は調査区外)	東西480 南北460
平面プラン		楕丸のやや歪んだ正方形	ほぼ正方形 (2/3は調査区外)	楕丸のほぼ正方形
主軸方向		N-13'-E	N-35'-E	E-7'-S
遺存状態		やや不良	やや良好	—
壁の立ち上がり		急	急	—
確認面からの深さ(cm)		約20	約30	—
床面	貼床	不明	あり	不明
	起伏	なし	なし	若干あり
	傾斜	なし	なし	西側にゆるやかに傾斜
	焼土	カマド焚口付近に	なし	カマド周辺に密
柱穴		1基	未検出	7基
カマド	位置	南壁東寄り	南壁西寄り	東壁南寄り
	住居跡主軸に対する割れ	2'-E	5'-W	8'-S
	遺存状態	やや良好	やや良好	不良
	煙道長さ(cm)	70	80	—
	本体長さ(cm)	100	70	60
	幅(cm)	60	75	75
	焚口の幅(cm)	50	60	—
	袖部	壁面から30cm張り出す	不明	不明
	焼土・炭化物	3層にわたる堆積	燃焼部に密	燃焼部に密
	支脚	あり	なし	あり

表1 穫穴住居跡観察表

項目	住居跡No	S T 2	S T 3	S T 4	S T 5
位 置(グリッド)		79-D 80-D 80-C 81-C	81-D 81-E 82-E 88-E	87-D 88-D 87-E 88-E	86-B 87-B 86-C 87-C
規 模(cm)	東西510 南北500	東西390 南北360	東西450 南北430	東西510 南北520	
平面プラン	圓丸のほぼ正方形	圓丸の長方形	圓丸のほぼ正方形	圓丸のほぼ正方形	
主軸方向	N-8°-E	N-16°-E	N-22°-E	N-7°-E	
遺存状態	やや不良	やや不良	やや不良	やや不良	
壁の立ち上がり	急	急	急	急	
確認面からの深さ(cm)	約25	30~40	15~20	約15	
床 面	貼床	—	中央部に一部認められる	あり	中央部、固くしまる
	起伏	—	ほとんどなし	なし	西壁面やや激しい
	傾斜	—	北側にゆるやかに傾斜	なし	西側にゆるやかに傾斜
	焼土	—	なし	なし	EP 3周間に若干
住 穴	—	5基	2基	20基	
カマド 位置	南壁西寄り	南壁東寄り	南壁東寄り	南壁東寄り	
住居跡主軸に對する傾き	10°-E	2°-E	1°-E	5°-E	
遺存状態	不良	やや不良	やや不良	不良	
煙道高さ(cm)	125	30	35	—	
本体長さ(cm)	60	85	65	80	
幅(cm)	70	50	65	70	
焚口の幅(cm)	50	40	40	45	
袖部	不明	西側に袖石	壁面から60cm張り出す	壁面から40cm張り出す	
焼土・炭化物	燃焼部に密	燃焼部に密	燃焼部中央	燃焼部周辺	
支脚	なし	あり	あり	なし	

項目	住居跡No	S T 6	S T 7	S T 8
位 置(グリッド)		89-D 90-D 89-E 90-E	80-F 81-F 80-G 81-G	79-D 80-D 80-C 81-C
規 模(cm)	東西360 南北350	東西—南北470	東西480 南北450	
平面プラン	圓丸のやや込んだ正方形 (2.31m調査区外)	長方形 (2.31m調査区外)	圓丸のほぼ正方形	
主軸方向	N-13°-E	N-35°-E	E-7°-S	
遺存状態	やや不良	やや良好	—	
壁の立ち上がり	急	急	—	
確認面からの深さ(cm)	約20	約30	—	
床 面	貼床	不明	あり	不明
	起伏	なし	なし	若干あり
	傾斜	なし	なし	西側にゆるやかに傾斜
	焼土	カマド焚口付近	なし	カマド周辺に密
柱 穴	—	1基	未検出	7基
カマド 位置	南壁東寄り	南壁西寄り	東壁南寄り	
住居跡主軸に對する傾き	2°-E	5°-W	8°-S	
遺存状態	やや良好	やや良好	不良	
煙道高さ(cm)	70	80	—	
本体長さ(cm)	100	70	60	
幅(cm)	60	75	75	
焚口の幅(cm)	50	60	—	
袖部	壁面から30cm張り出す	不明	不明	
焼土・炭化物	3層にわたる堆積	燃焼部に密	燃焼部に密	
支脚	あり	なし	あり	

IV 出土遺物

1 土師器

本遺跡においては、壺・甕・把手付碗等が出土した。器種としては、煮沸形態としての甕類が最も多く図示可能なものだけでも28点を数える。共伴・出土の状況等から多少の年代差は認められるものの、おむね同時期に煮沸形態として赤焼土器と共存していたものと思われる。器形として、体部の張りが少なく口縁部が短く外反して外外面にハケ目調整が施されているものが多く見られる(1・3・20・33・47)。S T 6出土の(31)は、カマドの焚口付近に半ば埋設されており内外面にハケ目調節が施され、口縁部から肩部にかけて欠損し、体部約1/3余りを残した上で底部からの高さ6.3cm程で切削加工したと思われる器形である。切断面をほぼ平均に削った形跡が窺われ、二次転用されたと考えられる。また、底部には木葉痕・網代痕が認められるものもあり(30・31・32・46)、底部近くに黒い煤様のものが付着している上、体部が赤褐色を呈しているため、強い火熱を受けたものと思われる。供膳形態では、壺・甕の出土を見た。壺は3点を図化したが、実測不能の細片も合わせると14点余りが出土した。いずれも黒色処理され内外面共にヘラミガキが施されており、うち2点(13・14)は、平高台付として分類したが、いずれも平高台・削り出し高台のように見える高さが4mm余りの付け高台である。その他の供膳形態の器種として、S T 4より把手付き碗が1点出土しているが、体部・口縁部・把手が約1/3遺存しており、口径91mm余りの「持つ」形態の碗で、壺類と同様に黒色処理が施されて内外面及び彎曲した把手にいたるまで丁寧にヘラミガキされたものである(22)。

2 須恵器

供膳形態としての蓋・壺・貯蔵形態として、甕・横瓶等が出土している。本遺跡の遺物の出土傾向として特徴的なのは、須恵器類の壺に比して上回る蓋類の出土であるが、実測不能のため図化できなかったものだけでも、21個体を数える。回転ヘラ切り離し型(50)、回転系切り型(6・15)、の2タイプが認められ、ラケゼリによる仕上げ調整がなされている。中央部に窪みのあるつまみを持ち口縁部がやや直立する器形(50・82・83)とつまみが偏平様で、口縁部は端部を下方へ折り曲げただけの器形(15・61)に大別できる。

底部の切り離しが糸切りによる壺(16・53・67・70・85・86・97)巻き上げ技法へラ切りの須恵器壺(23・35・36・51・63・85)が共伴しており、切り離し後のヘラケゼリ調整のあとが見られるものが多い(16・35・86・96・97)。底面に墨書が認められる壺が3点、ヘラ記号「×」印が記されている壺が1点であるが、いずれも回転糸切りによって、底部の切り離しがなされている。

高台付壺にも回転ヘラ切り(52・71)と回転糸切りによる切り離し技法(39)が用いられ、切り離し後にケゼリが施されており、付け高台である。甕はすべて破片資料で大型のものが多く、打圧調整は外表面が平行タクティ目、内面には同心円・青海波風アテ痕が認められる(7・17・18・40・42・54・90)。(18)は厚壁17mmを計る大甕であるが、唯赤褐色を呈し、甕表に条

線状タキ目、内面には松葉様が放射状に広がるアテ痕が認められる。この放射状アテ痕については、天童市二子沢D地点1号窯跡出土の須恵器裏片のアテ痕に酷似する。SD100から出土した大甕口縁部の破片資料は、大きく口縁部が外反して口唇が引き出され、外面に櫛波波状が施され外面に淡緑色の自然釉を被っている。(73)は横断として捉えたが、ロクロ形成後、外面に平行タキの打圧調整が加えられ、内面にナデによる調整と指頭の押圧痕が認められる。肩部の接合部と思われる部分が、やや四状に段を形成して巡っている。(93)は双耳环の把手と考えられるが、同様のものは図化できたものを含めて3点が確認され、いずれもヘラケズリが認められた。

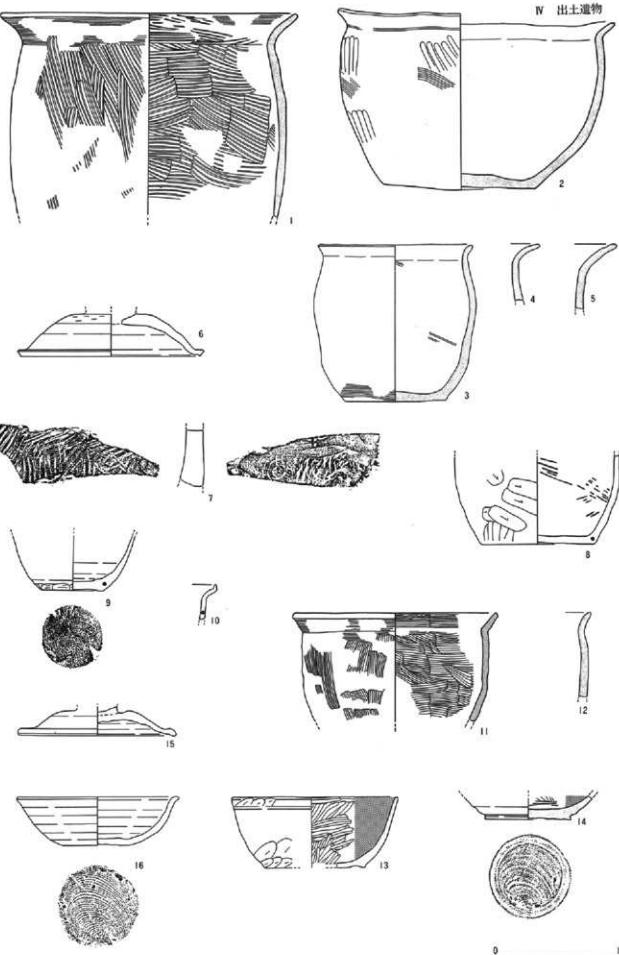
3 赤燒土器

器種は煮沸形態としての甕に統一され、口縁資料を含め11点を図化した。土器器と共伴しており、小形甕(8・9・29)、中形甕(91)、長胴甕(25・57)に分類できる。いずれも頸部が「く」の字状に屈曲する共通点を有するが、頸部の形状から以下の通りの分類が可能である。口径と頸部の最大がほぼ同値のもの(25・57)、頸部が綺まらず、外反する口縁部に最大径を持つもの(29・91)、口唇部にわずかなかえりが見られるもの(26・74)、外反した口縁部から口唇がわずかに垂直に立ち上がるるもの(10・55)。各住居跡における土器器との共伴は、器形の差異から多少の時期差はあるとしても各々が明確に調理具としての機能を果たしていた一時期の存在をうかがい知ることができる。小形甕・中形甕ともに体部から口縁部にかけて、黒い煤様のものが付着しており、器面は、ロクロ・ヘラケズリ・ナデの調整が施されている。大形長胴甕は、2点が実測可能であったが細片・口縁部資料を合わせて6個体分程が出土している。平底で内外面共にロクロ痕、ケズリやナデによる再調整が施され、底部には黒い煤様のものが付着して、体部から口縁部にかけて部分的に赤褐色を呈しており、強い火熱を受けたことがうかがえる。いずれも住居跡内のカマ付近からの出土で、日常の生活器として機能分担して用いられたものと思われる。

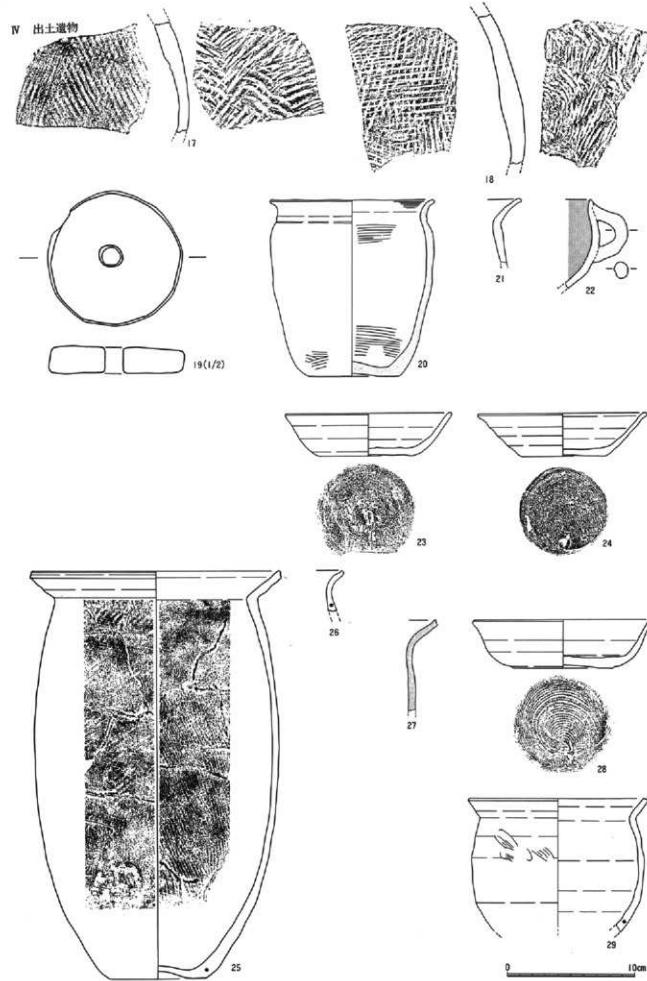
4 石製品・鉄製品など

(19・75)は石製紡錘車で、ST 3・ST 8から出土した。(19)は約1/2が欠損している。C区掘り下げ中に磁石、ST 6からフイゴの羽口、鉄製刀子、鉄滓の出土を見た。磁石は、全面に磨き痕が見られる片で、フイゴの羽口は外面に火熱痕が見られる。鉄滓については図化されたほかに1点遺構検出中に出土した。出土時には、既に1/2塊状であったが、断面を観察すると粒が炭化してつまれており、表面には粉痕と単葉の葉脈痕が確認される。刀子はほぼ完形で、他にB区掘り下げ作業中に2点の鉄片らしきものの出土を見た。

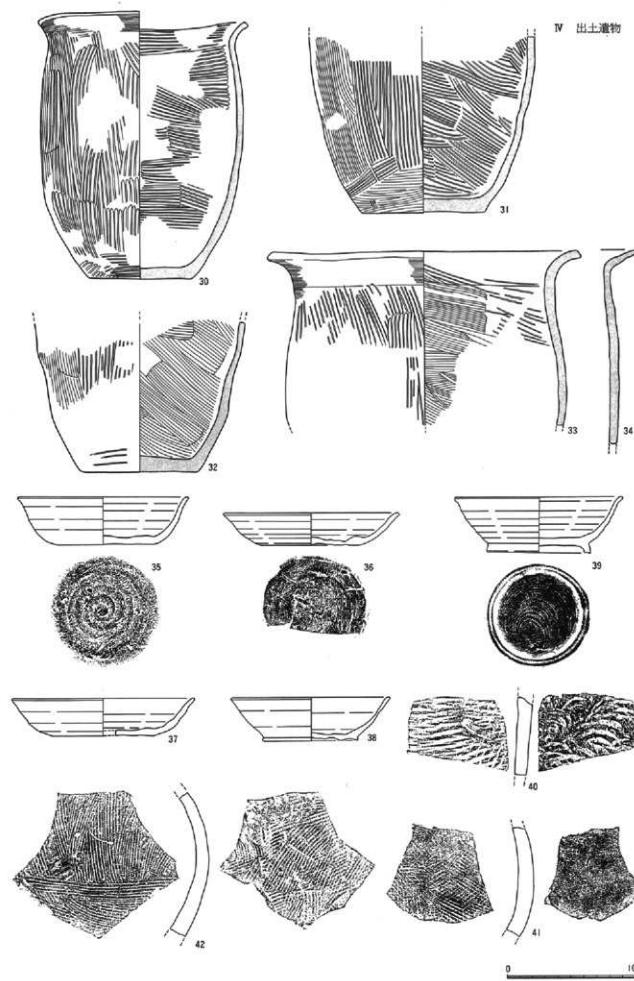
(93・94・95・100)は繩文晩期の浅鉢の片、石匙2点、磨製石斧であるが、いずれも二次的な混入によると思われる。



第13図 ST 2・ST 3 住居跡出土遺物

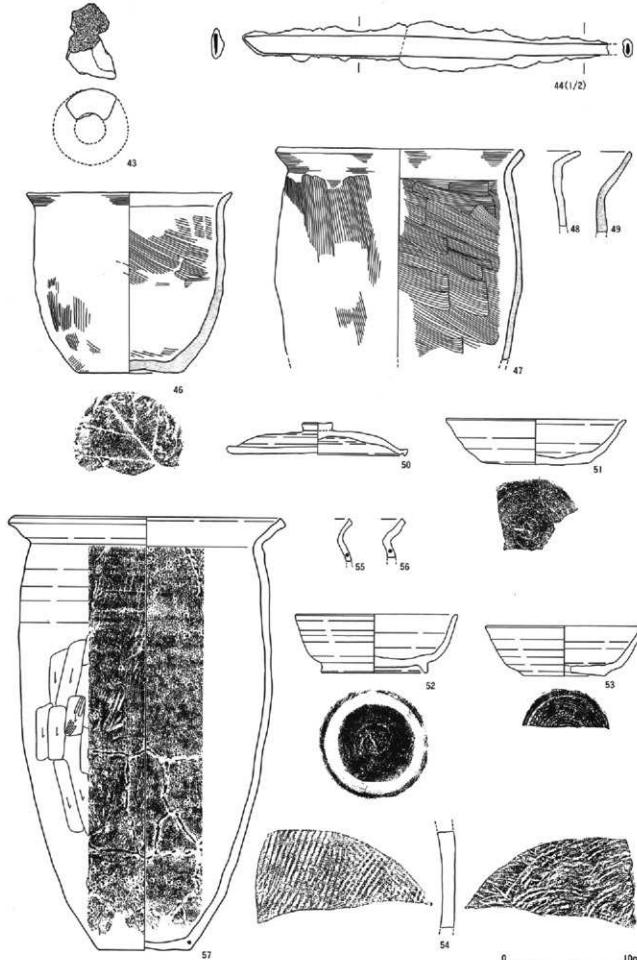


第14図 ST 3・ST 4・ST 5住居跡出土遺物

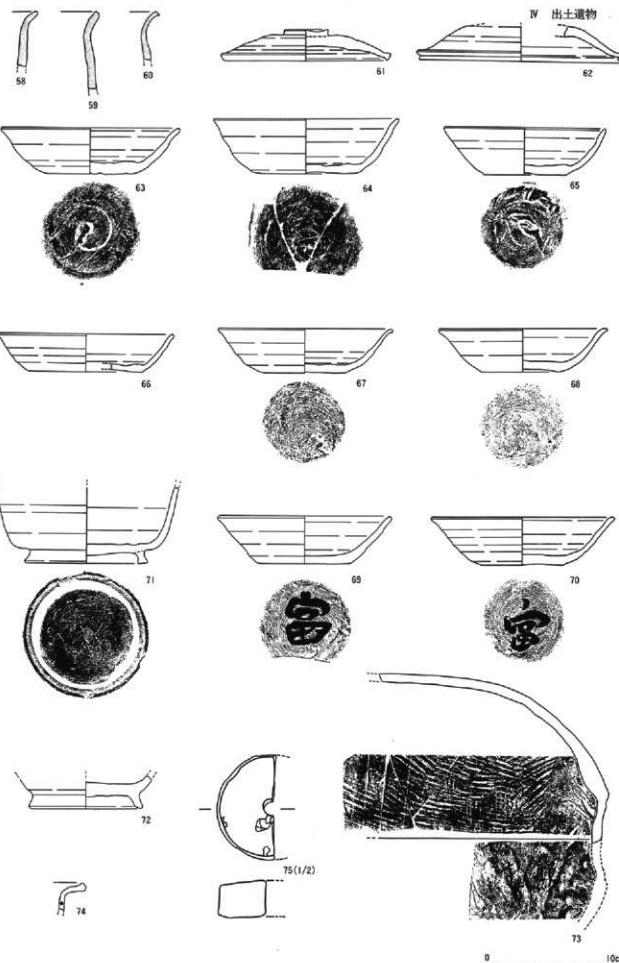


第15図 ST 6住居跡出土遺物

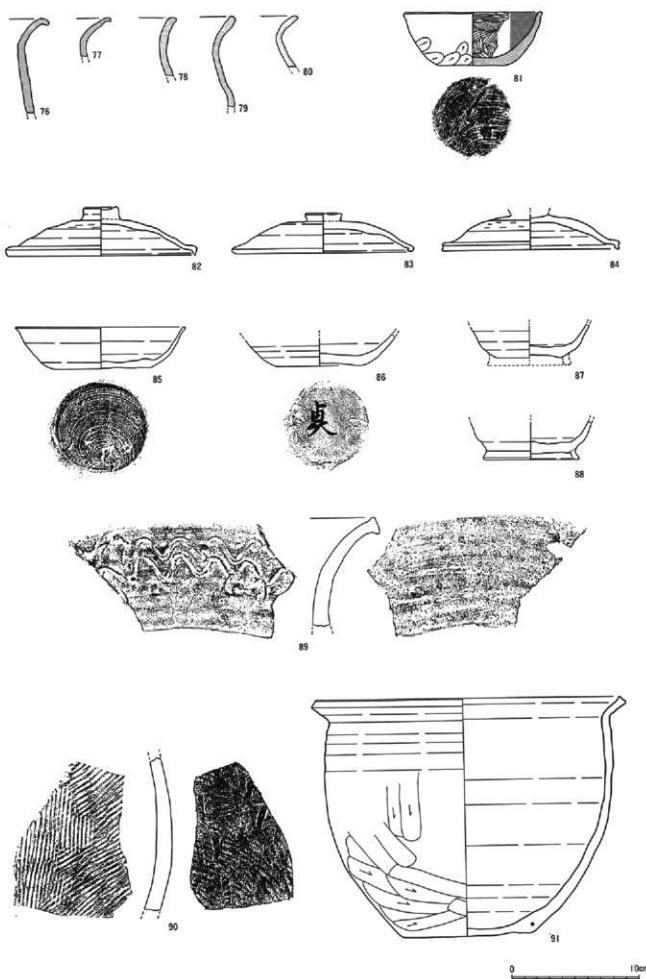
IV 出土遺物



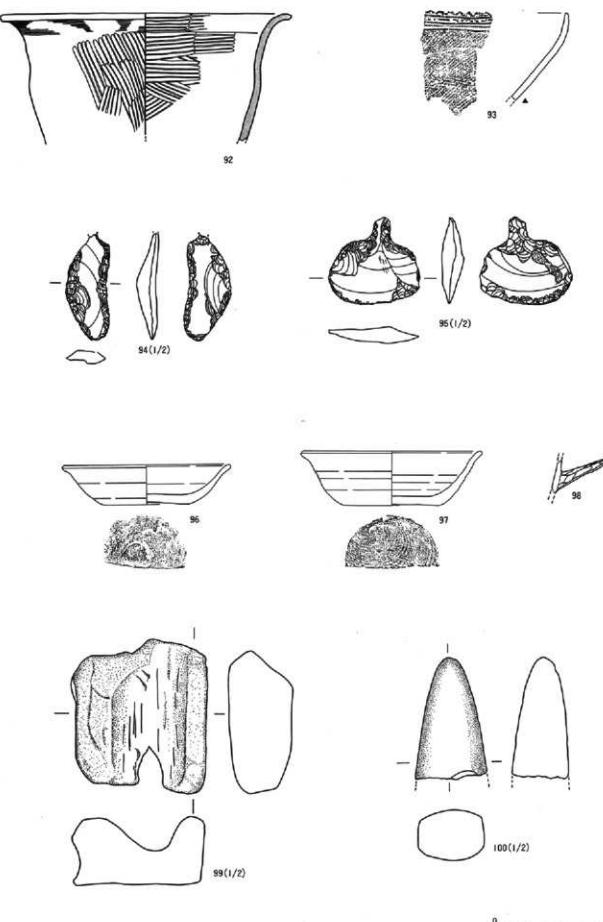
第16図 ST 6・ST 7 住居跡出土遺物



第17図 ST 8 住居跡出土遺物



第18図 SD180出土遺物



第19図 SD112・B区・C区出土遺物

IV 出土遺物

表 2 出土遺物観察表(1)

押図 番号	遺物 種別	器種	計 底径 深底 厚底	値 (mm)	底部	調整技術		出土地点			
						外面	内面				
1	土 壁 器	壺	(236)	6	ハケ目	ハケ目	ST 2				
2			214	120	143	5	ハケ目・ミガキ	ST 2			
3			138	82	124	6	削り	ST 2			
4					5.5		ハケ目	ST 2			
5					7		ハケ目	ST 2			
6	須 惠 器	蓋	(146)	5	ロクロ痕・削り・灰被り	ロクロ痕・灰被り	ST 2				
7				18	平行タクキ	同心円アテ痕	ST 2				
8			(130)	90	(69)	15	削り	ST 2			
9				50	4	回転糸切	ロクロ痕・削り	ST 2			
10					3			ST 2			
11	土 簡 器	高 台 壺	(162)	6	ハケ目	ハケ目	ST 3				
12				7	ハケ目	ハケ目	ST 3				
13			(137)	56	7	ロクロ痕・削り	ミガキ・墨色熱理	ST 3			
14				68	4	回転糸切り	ロクロ痕	ST 3			
15				125	22	5	ロクロ痕・削り	ロクロ痕	ST 3		
16	須 惠 器	壺	130	62	38	5	回転糸切	ロクロ痕	ST 3		
17					14	平行タクキ	平行アテ痕	ST 3			
18					17	平行タクキ	平行アテ痕	ST 3			
19			石製鋤車	径71				ST 3			
20				130	75	139	6	ハケ目	ハケ目	ST 4	
21	土 簡 器	要				6.5	ハケ目	ハケ目	ST 4		
22			把手付椀	(91)	(42)	(69)	6	ミガキ	ミガキ・墨色熱理	ST 4	
23				131	80	34	5	ヘラ切・ケズリ	ケズリ・ロクロ痕	ST 4	
24				135	70	34	4	回転糸切	ナデ・ロクロ痕	ST 4	
25				(198)	(76)	322	6	指頭圧痕	ロクロ痕・平行タクキ・削り	ロクロ痕	ST 4
26	赤 漆 土 器	要				6	削り		ST 4		
27						6	ハケ目	ハケ目	ST 5		
28						5	回転糸切	ロクロ痕・削り	ロクロ痕	ST 5	
29				144	80	39	5	回転糸切	ロクロ痕・削り	ロクロ痕	ST 5
30						7	ロクロ痕	ロクロ痕	ST 5		
31	土 壁 器	壺		165	80	5	側面削	ハケ目	ハケ目	ST 6	
32					95	5	木葉痕	ハケ目	ハケ目	ST 6	
33					90	117	6	木葉痕	ハケ目	ST 6	
34				(240)	(137)	5	ハケ目	ハケ目	ST 6		
35						7	巻上痕・ケズリ	ロクロ痕・削り	ロクロ痕	ST 6	
36	須 惠 器	壺		(146)	78	27	4	ヘラ切	ロクロ痕	ロクロ痕	ST 6
37				(144)	80	29	5	巻上痕・ヘラ切	ロクロ痕	ロクロ痕	ST 6
38				(128)	73	34	4	巻上痕・ヘラ切	ロクロ痕	ロクロ痕	ST 6
39				133	82	44	4	回転糸切・ナデ	ナデ・ロクロ痕	ロクロ痕	ST 6
40						12	平行タクキ	同心円アテ痕	ST 6		
41	土 簡 器	要				14	平行タクキ		ST 6		
42						12	ハケ目	ハケ目	ST 6		
43				羽 口	長(58)	径(60)				ST 6	
44				裁縫刀子	長195	幅25	15			ST 6	
45				鉛 淬						ST 6	
46	須 惠 器	蓋		(162)	80	7	木葉痕	ナデ・ハケ目	ハケ目	ST 7	
47				(196)		5	ハケ目	ハケ目		ST 7	
48						6.5				ST 7	
49						8	ハケ目	ハケ目		ST 7	
50				須 惠 器	蓋	144	25	5	ヘラ切	ロクロ痕・ナデ	ロクロ痕

第13回

第14回

第15回

第16回

表 3 出土遺物観察表(2)

押図 番号	遺物 種別	器種	計 底径 深底 厚底	値 (mm)	底部	調整技術		出土地点			
						外面	内面				
51	須 惠 器	環	(142)	80	36	5	ヘラ切	ロクロ痕・削り	ロクロ痕	ST 7	
52			高 台 環	128	84	46	4	ヘラ切	削り・ロクロ痕	ナデ・ロクロ痕	ST 7
53			环	126	66	39	5	回転糸切	ロクロ痕・削り	ロクロ痕	ST 7
54						12		平行タクキ	青海波風アテ痕	ST 7	
55						3		削り		ST 7	
56	赤 漆 土 器	壺				9				ST 7	
57				218	74	342	5	ロクロ痕・タクタ・削り	ナデ	ST 7	
58						6		ロクロ痕	ハケ目	ST 8	
59						7.5			ハケ目	ST 8	
60						6			ハケ目	ST 8	
61	須 惠 器	蓋		133	25	5	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ST 8	
62						5		ロクロ痕	ロクロ痕	ST 8	
63				(142)	70	4	巻上痕・ヘラ切	ケズリ・ナデ・ロクロ痕	ナデ・ロクロ痕	ST 8	
64				(147)	80	5	ヘラ切・ケズリ	ロクロ痕	ロクロ痕	ST 8	
65				128	65	37	4	ヘラ切	ナデ・ロクロ痕	ナデ・ロクロ痕	ST 8
66	須 惠 器	壺		(140)	(90)	29	4	ヘラ切	ロクロ痕・灰被り	ロクロ痕	ST 8
67				(138)	64	35	5	回転糸切	ロクロ痕	ロクロ痕	ST 8
68				(126)	61	35	5	回転糸切	ロクロ痕・火漆	ロクロ痕	ST 8
69				(138)	72	38	4	巻上痕・記号	ロクロ痕・削り	ナデ・ロクロ痕・火漆	ST 8
70				(145)	65	4	回転糸切	ロクロ痕・削り	ロクロ痕	ST 8	
71	高 台 壺	高 台 壺				98	4	ヘラ切・削り	ロクロ痕	ST 8	
72						90	5	ヘラ切	ロクロ痕・削り	ロクロ痕	ST 8
73						15	削り	平行タクキ	指胴庄痕・ナデ・アテ痕	ST 8	
74						6				ST 8	
75				石製鋤車	径54		20			ST 8	
76	土 壁 器	要				6		ハケ目	ハケ目	SD 100	
77						6		ハケ目	ハケ目	SD 100	
78						6		ハケ目	ハケ目	SD 100	
79						8		ハケ目	ハケ目	SD 100	
80						6		ハケ目	ハケ目	SD 100	
81	須 惠 器	壺		(110)	52	42	6	回転糸切	削り	ミガキ・墨色熱理	SD 100
82				(156)		38	3	ヘラ切	ロクロ痕・削り	ロクロ痕・灰被り	SD 100
83				(143)	(37)	4	ヘラ切	ロクロ痕・削り	ロクロ痕	SD 100	
84				(136)		33	7		ロクロ痕・削り	ロクロ痕	SD 100
85				(133)	74	32	4	回転糸切・削り	ロクロ痕・ナデ	ロクロ痕・ナデ	SD 100
86	須 惠 器	蓋				66		ロクロ痕	ロクロ痕	SD 100	
87						62	4	回転糸切	ロクロ痕・自燃油	ロクロ痕	SD 100
88						75	4	ヘラ切	ロクロ痕	ロクロ痕・灰被り	SD 100
89						12			自然油・褐褐色波状紋	自然油	SD 100
90						13			平行タクキ	平行アテ痕・ハケ目	SD 100
91	赤 漆 土 器	蓋		(249)	10	188	6		ロクロ痕・削り	ロクロ痕	SD 100
92						7		ハケ目	ハケ目	SD 112	
93						6				B 区	
94				長55	幅23		10			B 区	
95				長45	幅48		12			B 区	
96	須 惠 器	壺		(133)	67	31	4	回転糸切	ロクロ痕・削り	ロクロ痕	C 区
97				(143)	74	43	5	回転糸切	ロクロ痕・削り	ロクロ痕	C 区
98										C 区	
99				砥 石	長81	幅70	34			C 区	
100				磨削石斧	長64	幅38	29			C 区	

V まとめ

今回の調査は、主要地方道山形・天童線の改良工事に先立つ記録保存のための発掘調査である。

調査によって得られた成果は、次のようにまとめられる。

1 遺構について 遺構の分布は、溝状遺構がA区（SD112）・C区（SD100）で検出されているのを除いて、B区に集中している。遺跡の中心は、分布調査で想定された範囲内の、より南に偏ると考えられる。

S D112・S D100は、幅・深さ等に違いはあるものの、いずれも西流し堆積土の上層に遺物を含んでいる。遺物の検討の結果、B区の集落と年代的には併行するものが大部分である。A区・C区では S D112・S D100の他に明確な遺構を確認できなかったが、付近にB区の集落と近い時期に集落が存在した可能性が高い。

B区では、堅穴住居跡が7棟、倉庫と考えられる掘立柱建物跡が1棟検出されている。遺構の在り方から、ある程度のグループ分けはできるが、それによる時期差を導くことはできない。唯一、重複した ST 2 → ST 8 の前後関係がいえるのみである。

また、平面プラン・主軸方向・カマドの設置位置などを包括的に見れば、共通性が高く何らかの規制を受けていたとも考えられる。

石製防衛車が検出されたこと、小轍治の工房と考えられる住居跡が検出されたこと、などから、この集落における手工業生産の要素も想定することができる。なお、鉄製品の生産に関わって、本遺跡から北西1kmほどのところに金谷跡があり、かつて鉄滓が大量に採集されたという。本遺跡と同じく押切川南岸に立地しており、押切川の砂鉄を利用して製鉄を行ったという言い伝えがある。原料・燃料の供給を含めて今後の検討課題としておく。

今次の調査では、集落を構成する要素としての井戸跡等は検出されなかつたが、道路の予定路線の幅でしか調査を行っていないため、当然東西方向への集落の広がりが想定でき。種々の要素を未発掘になっていると考えられる。

2 遺物について 各遺構から出土した土器を概観すると、形態・技法に年代的な幅を考えなくてはならないが、遺構毎に明確な時期差を見出すことは難しい。一括して考察することとする。

本遺跡で出土した土器は、土師器・須恵器・赤焼土器である。赤焼土器については、種々の定義があり、解釈に幅があるが、本報告書では、酸化焰焼成で成・整形の段階でロクロを使用したと認められるものを赤焼土器としている。

土師器の器種には供膳形態の壺と、煮沸形態の甕がある。須恵器には供膳形態の蓋・壺高台壺、貯藏形態に甕・横瓶がある。供膳形態には、ロクロからの切り離し技法の違いでヘラ切りと糸切りに分類され、切り離し後の調整にもバラエティがある。赤焼土器には煮沸形態の甕がある。

供膳形態のうち、土師器の壺は3点のみであるが、いずれもロクロを使用し、外面にケ

ズリ、内面はミガキの後黒色処理を施している。須恵器の壺は、底部切り離しが回転ヘラ切りで、口径に比して底径が比較的大きく、比較的身の浅いものと、ほぼ同じ形態で底部切り離しが回転糸切りとなるものが、ほぼ同数混在する。底径がやや小さくなり、立ち上がりが直線的になり、やや時代が下がると思われる形態を示すものもあるが、例外的である。赤焼土器の壺・皿は出土していない。

煮沸形態の土器には、土師器と赤焼土器があり、土師器の甕は口縁部が「く」の字状に外反するものが多い。口縁部のみの破片も多く遺存状態はよくなかったが、大形から小形のものまで計28点を数え、数の上では最も多くなっている。

赤焼土器の甕も小形のものから長胴の大形のものまである。全体的には、器厚が薄く緻密なつくりとなっている。長胴甕は体部外面上部にヘラ削り調整の前にタタキの痕跡が認められるものもあり、やや古い様相を示す。小形の甕では、底部切り離しが回転糸切りとなるものもあり新しい様相を示すが、1個体のみである。全体的に、口縁部の上方へのつまり出しはそれほど顕著とはいえない。赤焼土器の壺は出土していない。

こうした特色を、山形盆地における平安時代前期の諸遺跡の様相に照合すると、8世紀末頃から9世紀台の年代が与えられる。距離的に近い荒谷原の遺跡群の古い時期（執筆者は第I期としている）の資料と傾向が似ており、ほぼ同時期と考えられる。

以上を総合すると、本遺跡は奈良時代末から平安時代初期を中心とした、手工業的生産の要素を含んだ集落跡といえる。ただし、今次の調査で明らかにできたのは、集落全体からするとほんの一部分であり、特に東西方向へ集落の範囲が広がっている可能性が高いが、全容の解明は今後の調査を待たねばならない。

参考文献

- 川崎利夫他「堀興野遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第46集 1981年
- 渡谷孝雄他「猪田C・D遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第76集 1984年
- 野尻 侃他「宮原原遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第90集 1985年
- 長崎 純他「下野木遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第100集 1986年
- 佐藤庄一・名和道朗他「西吉田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第101集 1986年
- 佐藤正俊・渡谷孝雄「遠野寺遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第104集 1987年
- 渡谷孝雄・黒坂義人「猪田D遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第111集 1987年
- 須賀新人・黑坂広美「平野山古窯跡群第12地点発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財報告調査報告書 第178集 1992年

天童市史編さん委員会「天童市史別巻上 地理・考古篇」 1978年

天童市史編さん委員会「天童市史 原始・古代・中世編」 1981年

山形県「山形県史 要覽」 1989年

村山信子「出羽高南半の須恵器生産をめぐって」「考古学研究」第33巻2号 1986年

杉井 健「甕の埋埴性とその背景」「考古学研究」第40巻1号 1993年

文化庁「特集 瓷土器の世界」「月間文化財」平成5年11月号 1993年

報告書抄録

ふりがな	おしきりいせきほくつちょうきほりこくしょ						
書名	押切遺跡発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第13集						
編著者名	浅黄喜悦 志田純子						
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター						
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301						
発行年月日	西暦 1994年 3月 31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
押切	山形県天童市 大字高木字押切	6210	平成元年 度登録	38度 22分 13秒	140度 22分 20秒	19930507～ 19930729	4000 主要地方道 山形・天童線 改良工事
所収遺跡名	様別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
押切	集落跡	平安時代 前半	堅穴住居跡 掘立柱建物跡 溝	7棟 1棟 2条 石製纺錐車 鐵製刀子 小鍛冶関連遺物 (羽口・鉄滓)			

図版



押切遺跡 B 区全景（南から）



押切遺跡近景（調査前 南から）



試掘トレンチ掘り下げ作業



重機による表土除去作業



A 区面整理作業

図版2



S D112精査状況（南から）



B区調査状況（南から）



C区基本層序（東壁）



B区基本層序（東壁）



調査終了状況（B区中央から南方）



調査終了状況（B区中央から北方）



空中写真測量作業状況



調査説明会状況

図版3



ST 2 検出状況



ST 2 精査状況



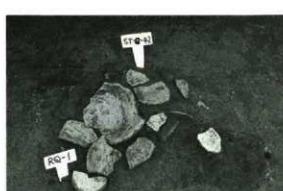
ST 2 カマド跡付近（北から）



ST 8 カマド土層断面（南から）



ST 2 遺物出土状況



ST 8 遺物出土状況



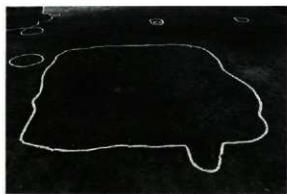
ST 2・ST 8重複状況（西から）



ST 2・ST 8完掘状況（北から）

ST 2・ST 8竪穴住居跡

図版4



S T 3 検出状況（南から）



S T 3 精査状況（北から）



S T 3 遺物出土状況



S T 3 遺物出土状況



S T 3 石製紡錘車出土状況



S T 3 カマド土層断面（西から）



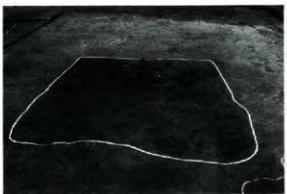
S T 3 カマド（北から）



S T 3 完掘状況（北から）

S T 3 竪穴住居跡

図版5



S T 4 検出状況（南から）



S T 4 精査状況（南から）



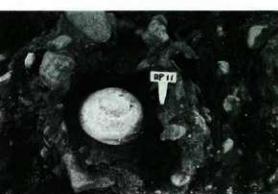
S T 4 精査作業（南西から）



S T 4 遺物出土状況



S T 4 遺物出土状況



S T 4 遺物出土状況



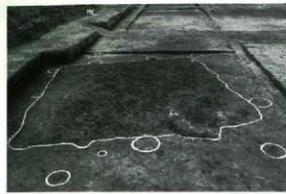
S T 4 カマド調査状況



S T 4 完掘状況（北から）

S T 4 竪穴住居跡

図版 6



ST 5 検出状況（南から）



ST 5 精査状況（南東から）



柱穴（EP 1）状況



柱穴（EP 3）状況



柱穴（EP 4）状況



ST 5 遺物出土状況



ST 5 カマド付近（北から）



ST 5 完掘状況（北東から 調査説明会のため柱根部を復元したもの）

ST 5 整穴住居跡

図版 7



ST 6 精査状況（南東から）



ST 6 遺物出土状況



ST 6 鉄製刀子出土状況



ST 6 カマド調査状況（西から）



ST 6 カマド（西から）



ST 6 カマド煙道部（西から）



ST 6 カマド（北から）



ST 6 完掘状況（北から）

ST 6 整穴住居跡

図版 8



S T 7 廃掘状況（北から）



S T 7 遺物出土状況



S T 7 カマド土層断面一（西から）



S B 114 建物跡（西から）



S D 100 遺物出土状況

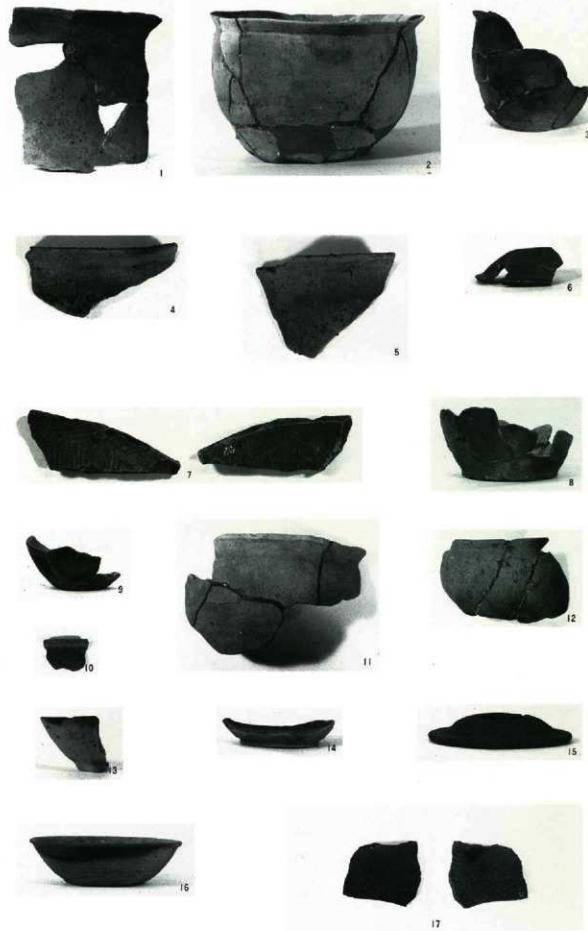


S D 100 廃掘状況（西から）

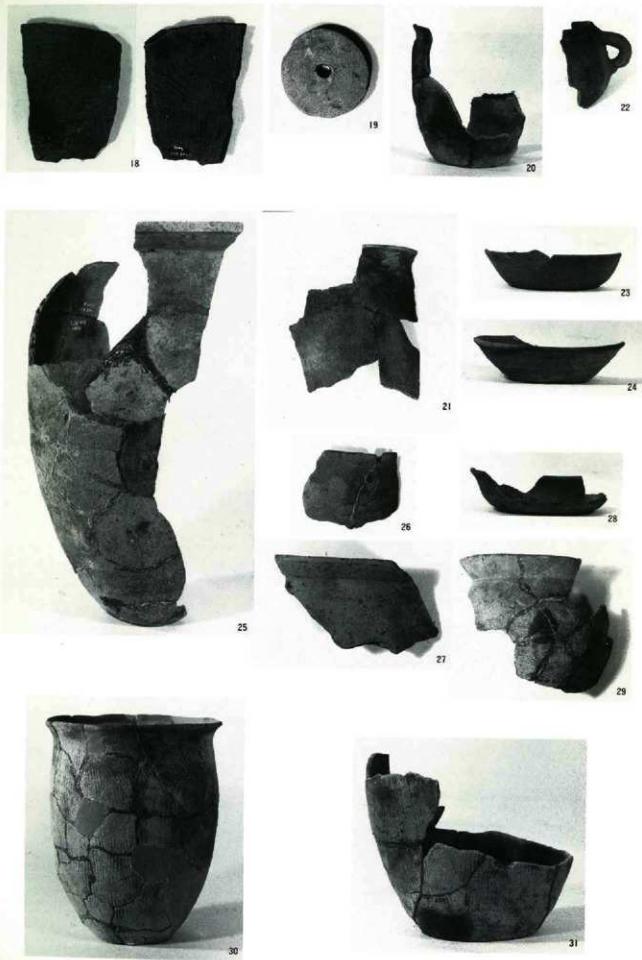


S D 112 廃掘状況（南西から）

図版 9



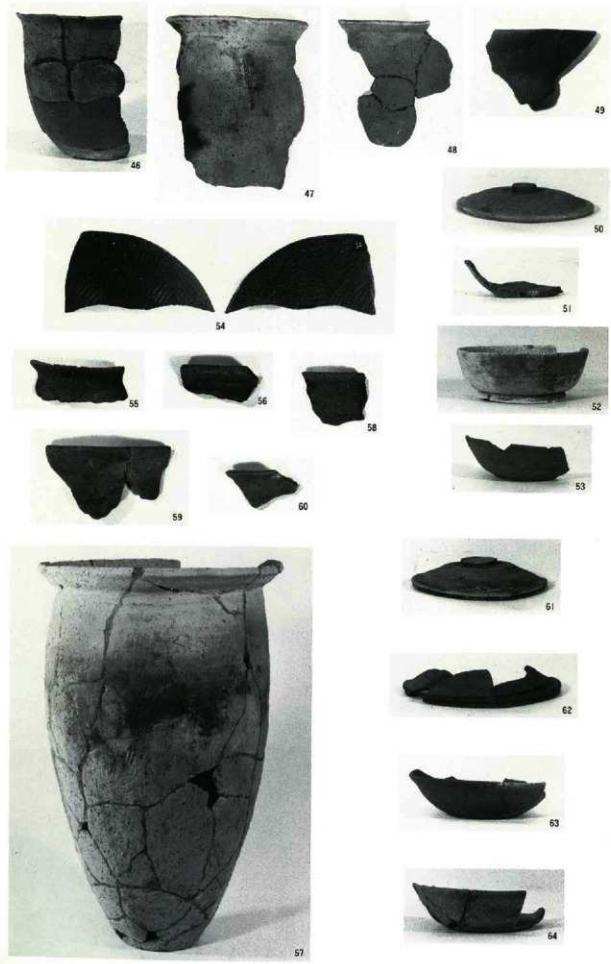
図版10



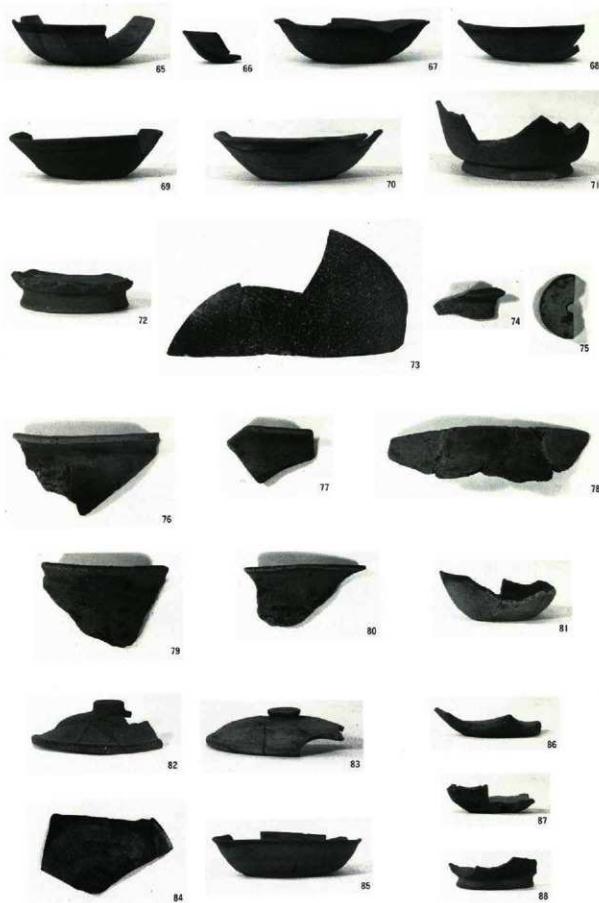
図版11



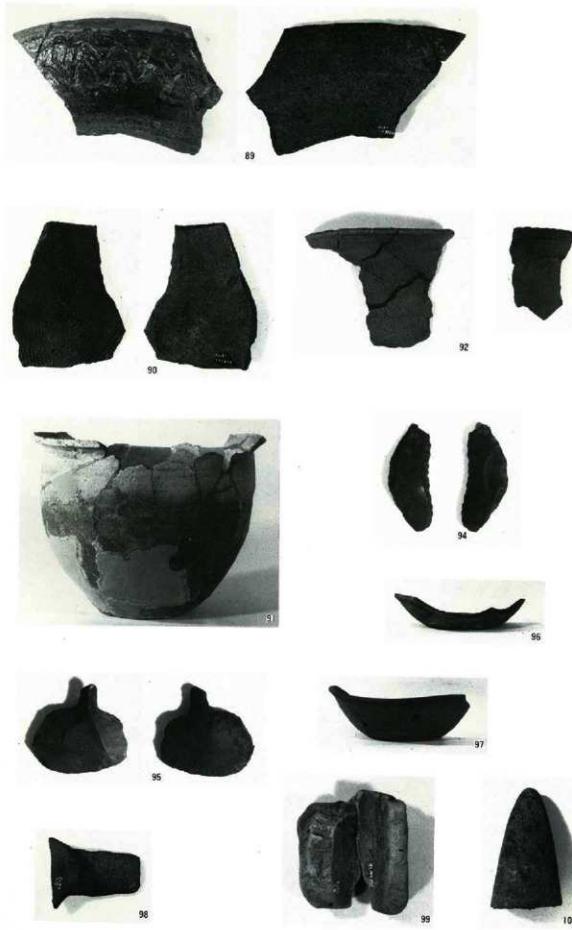
図版12



図版13



図版14



山形県埋蔵文化財センター調査報告書第13集

押切遺跡発掘調査報告書

1994年3月31日 発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 0236-72-5301

印刷 大場印刷株式会社